

ふかめる



平安時代(8~12世紀)

歴史に名を残した武将にも偉人にも、笑って泣けるドラマがあります。日本史が苦手な人もページをめくるのを待って、少しだけおつきあいでください。今回の主役は清少納言です。



清少納言

平安京のインフルエンサー?

インフルエンサーというのは、インフルエンザにかかった人じゃなくて、世の中に大きな影響をあたえる人のこと。21世紀の現在では、SNSなどを通して消費者の購買行動に大きな影響をあたえる人をさすことが多いですね。

清少納言という人

21世紀のインフルエンサーほど大きな影響をあたえているわけではありませんが、その言動が注目に値しているのが清少納言です。

「せいしょう・なごん」って読まれることが多いですが、清は名字の清原からきていて、少納言は肩書(じっさいに少納言じゃありませんが)なので、「せい・しょうなごん」って読んでください。

天皇が暮らす宮中で、天皇の妻のお世話をする「女房」と呼ばれる女性のひとりでした。女房になるのは、身内の男性に貴族がいる女性がほとんどです。かかろう清少納言も、お父さんも夫も貴族でした。女房をしていただけでは名前が残りません。彼女

は、宮中での日常を「枕草子」という随筆に書き残していたことで有名になりました。

平安時代のつぶやき

「枕草子」は随筆とされていますが、よくよく読むと、21世紀のX(ツイッター)で書かれる文章に似ています。Xのように文字数制限があるわけではありませんけどね。

「枕草子」の冒頭は有名です。「春は、曙。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこし明りて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる」

現代語訳すると「春は、曙。ようやく白んできた山の上の空が少し明るくなって、紫がかかった雲が細くたなびいている」ですが、小説家・評論家・随筆家の橋本治さんは「枕草子」(河出書房新社)で「春って曙よ! だんだん白くなってく山の上の空が少し明るくなって、紫っぽい雲が細くたなびいてんの!」と、1987年当時の若い女性を使いそうな言葉つかいで現代語訳しました。

良い影響、悪い影響

「枕草子」は日記のように書いておしまいというわけではなく、じっさいに宮中の人たちに読まれていたのだ。清少納言の「つぶやき」を読んだばかりの女房たちは「そうそう、あるある!」という声があつたことだろう。もし「いいね」ボタンがあつたらポチっついていそう。

逆に、清少納言が宮中から出ていったあとに女房となった紫式部のように、「得意げに賢ぶって漢字を書き散らしてあげよう、よく読むとそれほどもない」と日記に悪口を書く人もいます。良い影響、悪い影響、どちらもあつるわけですね。

もし21世紀に清少納言が生きたら、たぶんそれよりも早くSNSに飛びついて、「一日に何回も何十回もつぶやきを発信していたことでしょう。もし炎上しちゃっても、それをおもしろがっていいような気がします。草葉の陰からそんなことないわよ!」って、しかたられそうな気がしますけど。

楠木誠一郎

1960年生まれ、福岡県出身。日本大学法学部卒業。歴史雑誌編集者をへて、「十二階の檻」で小説デビュー。著書に「タイムスリップ探偵団」シリーズ(講談社青い鳥文庫)などがある。